
インディアンサマー

立花 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インディアンサマー

【Nコード】

N4079Q

【作者名】

立花 桜

【あらすじ】

大学生で身長174センチの主人公「すみれ」が新しいバイト先で出会う

男性との恋物語。

12月 プロローグ

インディアンサマー。

寒い冬に突然夏が来たかのように暖かくなる日ことをインディアンサマーと言うそうだ。

中学生の時、英語の授業で先生が言ってたこの言葉を大学生になった今でもなぜか覚えている。

12月10日、寒い日が続いていたが今日は春が来たみたいに暖かい。みんな久しぶりの太陽を楽しむためか、大学の中庭にはいつもより人通りが多い。

「すみれー、おはよう！」

美香がいつもと同じようにあくびをしながらこちらにやって来る。

「おはよう美香、今日も眠そうだね。同じ講義とってるのになんで私いつも一人なの？」

美香に講義のノートを渡すと彼女はいつもと同じようにノートを開き読み始める。

「だって、すみれのノートがあれば私はやっていけるもん」

私は彼女と高校生からの友人だが、彼女の記憶力は羨ましがらずにはいられない。

「本当に、その記憶力をフル活用すれば今頃もつといい大学にいられたのにね。」

ノートを読みながらまっすぐ歩く美香を横目にそうつぶやく。

「すみれだってその身長をフル活用すれば今頃テレビや雑誌に出れたのにね。」

美香も独り言のようにそうつぶやく。

「174センチあるし、細いし、名前もかわいいし、なんですすみれがここにいるのか理解できないよ」

ノートから顔をあげた美香がまじめな顔をして私を見る。私だっ

てモデルや女優になれるものならなってみたいよ。いや、本当は恥ずかしいから無理だけど。私の人生、この恥ずかしがりやという性格で98パーセントは絶対損している。

「名前は関係ないから、顔が残念だから無理かな。」

やっと誰も座っていないベンチを見つけ二人で腰掛ける。もちろん美香はノートを見たままである。今日は、暖かいせいか外にあるベンチはもう空いていないようだ。

「それより、私今日がバイト初日なんだ。」

そう言って美香を見るが、ノートを見ながらうなずいている。まったく聞いていない。ため息をついて空を見上げる。

インディアンサマー

昔から記憶の片隅にある言葉を思い出す。

「何のバイトにしたの？」

私の声が地球を1周してやっと美香の耳に届いたらしい。

「韓国レストランのウェイトレスするの。」

「すみれ高校のときからビビンバと冷麺マニアだったもんね、よかったじゃん。」

「そう、しかもそこのお店はビビンバは大学周辺では一番だからね。」

「じゃあ今度食べに行くから御馳走して！」

とびっきりの笑顔で言う美香をみて私も午後から始まる新しいバイトが待ちきれなくなった。

あれから1年

私は一生で一度のインディアンサマーに出会った。
突然で、とても暖かった。

そしてこれからもずっと彼は私のインディアンサマーであり続ける。

12月 プロローグ（後書き）

まったくの初心者で、思うがままに書きました。
趣味としてこれからも続けていきたいと思えます。
よろしく願います。

12月 自己紹介

「今日から新しく入りました細野すみれです。よろしく願いします。」

緊張していつもより高くなる声に気付き、更に心臓が痛くなる。

一人の客としてこのレストランへ来てビビンバの味に感動し、絶対ここで働きたいと考えていた。それからというものバイト募集の張り紙がないかを見るために毎日のようにお店の前を通っていたのである。12月の初め、募集のチラシを見た瞬間にレストランへ駆け込んでいた。

「細野さん、私のレストランへようこそ。これからよろしくね。」

店長のボムさんが笑顔で流暢な日本語を喋る。このレストランの名前「ボムズキッチン」はその名の通り「ボムの台所」という名前です。ボムさんが経営と厨房を取り仕切っている。駅の近くのレストランにある小さなお店だが、店内は白を基調としていて清潔感がある。昼はサラリーマンから、夜は家族連れでいつも満席になる。

「ここで働いてくれるのは、細野さんを入れてみんなで6人。2人は厨房で、後の3人はホール。細野さんにはホールをお願いするわ。シフト制で基本は厨房もホールも二人ずつよ。」

何度も同じ説明をしてきたのだろう、ボムさんは早口で続けた。

「今日出てるのは、厨房が健君でホールがヨナちゃんと淳君よ。ヨナちゃんがあなたの仕事を教えてくれるわ。」

少し幼く見える女の子は私に向かって右手を差し出してきた。

「ヨナです。交換留学生として韓国から来ました。すみれちゃんと同じ大学で勉強してます。よろしくね。」

どこことなく、日本語にアクセントがあるが会話には支障はなさそうだ。

「じゃあついでに。俺は厨房の健です。韓国料理好きで、ボムさ

んの元で修行してます。よろしくね。」

そういつて、健はすみれをまじまじと見る。わかってる、初対面の人に言われるのはいつも同じこと。

「すみれちゃんってでっかいね、モデルさんみたいだ。」

ですよね。でっかいのは、私にとって全然ほめ言葉じゃないのにな。

「ホール担当の淳です。同じ大学2年で理工学部。よろしく。」

敦はそう言いつて、すぐに目をそらした。身長が高くて細く繊細な雰囲気の子だ。

自己紹介が終つると、ヨナちゃんから仕事を教えてもらった。昔の飲食店のバイトの経験もあつたから、その日のうちにおおよその仕事を覚えることができた。お客さんが増え忙しくなると、あつという間に時間が過ぎていつた。周りのお店と比べて、ボムズキツチンの閉店は9時と早い。忙しくて、大変だけど、お客さんが笑顔でいっぱい食べてる姿を見るとなんだか嬉しくなる。それがビビンバだとなぜかすごく嬉しくなる。ここでバイトできて本当に良かった。

よし、明日からも頑張ろう。

12月 自己紹介（後書き）

次回はもっと早く続きを書きたいです。乱文失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4079q/>

インディアンサマー

2011年4月7日22時25分発行